



「災」と「禍」を乗り越えて

校長 安部正幸

表題の「災(い)」と「禍」は、訓読みではいずれも「わざわい」と読みます。前者は「天災のように防ぎようのないわざわい」、後者は「人為的な努力によって防ぐことができるわざわい」として使い分けられています。

あれから10年

3月11日、あの東北地方太平洋沖地震発生から10年がたちました。十年一昔と言いますが、現在の復興状況や先月13日に発生した余震を考えると、東日本大震災はまだまだ現在進行形であると言えます。そして10年後の今、私たちはコロナ禍の中にあり、新型コロナウイルス感染症と戦っています。

自分の身は自分で守る

「災」も「禍」も乗り越えるために最も大切な考え方は「自分の身は自分で守る」ということです。この言葉は、学校で避難訓練を実施するたびに生徒の皆さんに伝えてきました。大地震が発生した時、子供たちが学校で学んだことを思い出して、それぞれがバラバラに高台に向かい助かったという話は「津波てんでんこ」という言葉と共に有名な話です(釜石の奇跡)。何事も人任せにするのではなく、今自分の身を守るためには何をしなければならぬかを冷静に考え判断し、行動する力を身に付けておくことは、これからの人生を歩んで行くうえでとても大切なことだと言えます。

「忍耐」：74期生に贈る言葉

苦しさ、辛さ、悲しさを耐え忍ぶという

意味です。現在千円札の肖像にもなっている野口英世博士は「忍耐は苦(にが)し、されどその実は甘し」という言葉を残しています。これは、苦しみを耐え忍んでこそいい成果が得られるということを言っています。今はコロナ禍の中で、様々な我慢を強いられていますが、これを耐え忍んで乗り越えていけば、その先にはきっと良いことが待っていると思います。そのことを信じて進んでいきましょう。



校長室のお雛さま(2年7組 本多 鷺羽 君作)

臨時休業から始まった令和2年度も間もなく終わろうとしています。今、校長室では一対のお雛さまが春の訪れを明るく知らせてくれています。令和3年度が良い年度になりますように。